



白い  
ズボン  
さっ  
さっ

作  
かよりん

「次は、四年生による、二〇〇メートル走です」

朝礼台に立った先生が、サッと手を上げた。

ジャーンジャカジャカジャンジャン、聞きなれた『天国と地獄』のレコードがかかる。ホイッスルが、ピーっと鳴り響く。

ぎゅっと奥歯をかみしめた四年生たちが、横六列になって入場門からかけだすと、「うわ〜っ」という声援と拍手があふれた。最初のグループがスタートラインに並ぶと、運動場が、一瞬静かになった。

バーン！耳をつんざくピストルの音と共に、次々とスタートしていく。

いよいよ、次だ。とし子は、ぐぐぎーっと悲鳴をあげている胸に手を当てた。おかつは頭の赤いはちまきをきつく締めた。そして、スタートの白い線へと進む真っ白いズックぐつを、祈るようにじっと見つめる。それから、空を見上げると、ふーっと一つ、息を吸った。色とりどりの万国旗が、すきとおった青空にゆれている。

今朝、早く目が覚めたとし子は、のそのそと布団からはい出して、カーテンを開けた。にくらし  
いくらい晴れ渡った青空だ。

とし子が、白い体そうシャツと黒いブルマに着替えて茶の間に入ると、白黒テレビが、にこやかな  
アナウンサーを映していた。

「こちらは、『東京タワー』と名称も決まった日本電波塔です。日本の誇り、三三三メートル。  
昭和三三年十月十四日、ついに、あと一週間で完成です」

テレビを見ていたお父さんが、ふり向いて言った。

「とし子、おはよう、えらい早いなあ」

台所にいたお母さんが、肉団子をまるめながら笑って言った。

「折角のお天気なのに、雨降るんちゃう」

「いっそ台風でも来て、大雨になってほしいわ」

そう言ったとし子が、ぶすつとしたままちゃぶ台のおにぎりをつまんだ。そこへ、おばあちゃん  
が、ちょっと肩で息をしながら、ゆっくりと入って来た。お母さんが、お茶をいれて言った。

「おばあちゃん、一人でお散歩？大丈夫ですか？無理しないでくださいね」

「おおきに、今日はなんか、気分がええんやわ。この調子やったら、運動会も見に行けるかもしれ  
へんわ」

お茶をおいしそうに飲んだおばあちゃんは、とし子に笑顔を向けた。

「とし子ちゃん、おはよう。えらい機嫌が悪いんやなあ。そうや、学校へ行く前に、お社へ寄っ  
てみたら？ええことあるかもしれへんよ」

おばあちゃんは、そう言うと、入れ歯のない口をすぼめて、ほわほわと笑った。

とし子は、口のへの字にしたまま家を出た。このまま学校へ行くのも早すぎる。おばあちゃんの  
言うとおりにするのもしゃくな気がしたけれど、少し回り道をして、社へ足を向けた。秋祭りの  
時以外は、忘れられたような小さなお社だ。背の高い木の下で、雑草の朝露が、たくさんの青い  
空を映していた。

「あ～運動会いややなあ。徒競争いややなあ。なんでこない遅いんやろ、私の足」

ぶつぶつ言いながら、それでも、賽銭箱の前で、擦り切れた鈴緒をふって手を合わせた。

「一等とは言いません。せめて三等、いえ五等、いえ、ビリでも、去年みたいなとびきりビリに  
なりませんように。ドジ子と言われるのは、もう嫌です」

背中をまるめたまま、とし子は、お社の裏へまわってみた。

「こんなことで速く走れるんやったら、誰も苦労はないわなあ。お賽銭もないし。おばあちゃ  
ん、何あほなこと言うとのやろ」

ため息をつきながらそう言うと、むしゃくしゃして、石ころをぼ～んとけった。それが、ほんの  
少し黄色くなり始めた銀杏の木の根元に転がった。朝日に照らされて、なにかきらっと光ったよ  
うな気がした。ゆっくりと歩いて行くと、白いきれいなズックぐつが、右と左、行儀よく置かれ  
ていた。

「落し物かなあ。さらっぴんみたいやけど」

あたりをそうっと見まわしてみた。木や草が風にゆれているだけだ。

もう一度きよろきよろすると、自分の古びたくつをぬいで、右足をこわごわ入れてみた。ぴったりだ。それから、左足もぐいと入れた。一步、二歩と歩いてみる。

「うわっ、何？かるい！」

そう言いながら、とし子は、ぴよんぴよんはねた。足が勝手にジャンプしてるみたいだ。このくつをはいたら、あの青い空に浮かんでいる雲まで飛んで行けそうだ。

「ひや～、これはきっと神様のくつやわ。」

そう言って、とし子は、はっとした。

「こんなくつはいたら、一等賞とれるかも。」

言ってしまうてから、とし子の胸がばっくんばっくん鳴った。あわててまた、辺りを見回した。大急ぎで、ぬいだ自分の運動ぐつを、草の茂みの奥に隠した。

「位置について！よう～い！」

バーン！

とし子は、思い切って大きく一步を踏み出した。でも、気がつくともう、五人が前を走っている。

(今年もやっぱりビリや)

悔しい想いが広がって、下を向いてしまう。その時、ズックぐつが目に入った。

「神様のくつ！」

とし子は、思いっきり肘を後ろへふった。かかとをけて、ももをあげた。

音が消える。

すべての色が消える。

前を走る子の背中だけを見つめた。その背中が、少しずつ近く大きくなる。

(あっ、ならんだ！)

とし子は、夢中で肘をふった。

(えっ、抜いてる。私が抜いてる！)

すぐ後ろの子の息が首筋にかかる。体中を足にして走る。

(あっ、ゴールや。)

消えかけた白いゴールラインをバーンと踏みつけた。ハーハー息がはずんで苦しいけれど、体がふわふわする。退場門を出るまで、とし子の頭は真っ白で、汗ばんだ体の中から、金や銀の光りがあふれ出てくるようだった。

(やった～！ビリと違う。やっぱりこのズックのおかげや)

五、六人の友達が、とし子を囲んだ。

「としちゃん、がんばったやん」

「はじめてやなあ、すごいなあ」

「ほんま、もうドジ子って言わへんわな」

「わたしも、ごめんな」

父兄席の後ろを通る時、お父さんとお母さんに、顔をくちやくちやにして手をあげた。その横で、泣きそうに笑いながら、こっくんこっくんうなずいているおばあちゃんに、大きく手をふった。

「おばあちゃん、どうしたの？ぼーっとしてて」

耳のそばの孫のさやかの声に、はっと我にかえると、リビングの薄型の大きなテレビが、声をはずませたレポーターを映していた。

「三月に六三四メートルに達した『東京スカイツリー』来年のグランドオープンに向けて、急ピッチで工事が進められています」

としばあさんは、ほっとため息をつくと、窓から見える秋空に、目を細めて、さやかの方を向いた。

「今日の運動会、いいお天気でよかったね」

「どうでもいいんだけどね。どうせビリだし」

四年生のさやかも、運動は苦手のような。そんなさやかに顔を向けた。

「さやかちゃん、ビリにならないいい方法があるのよ、お社へね……」

「なにそれ～ばかばかしい。私はね、走るのはビリでも、一等のこと、いっぱいあるんだもん」

さやかは、つんと胸をそらし、人差し指をゆらしながら言う。

「今はコセイのジダイなんだよ、おばあちゃん」

そう言うのと、おしゃれなラインのはいったトレーニングウェアを着て、ばたばたと玄関に向かう。スニーカーをはくと、

「パパ、ママ、おばあちゃん 行ってきま～す」

さやかは、勢いよくドアを閉めて、一緒になった友達と楽しそうにかけていった。そんなさやかを見送っていたおばあさんは、ひとりでに笑いがこみあげてきた。

「どっこいしょ、さて」

おばあさんは、自分の部屋へもどると、押し入れに体をつっこんだ。その奥の奥からなんとか、古びた箱を取り出した。ふ～っと、ほこりをはらうと、ふたを開けた。中に入っていたのは、古びた白いズックぐつ。

「後から考えれば、これはおばあちゃんの最後のプレゼントだったのよねえ。うふふ、次の年から、また堂々とビリだったけど」

あれから箱にしまったままの、白いズックぐつ。

ジャンジャカジャカジャンジャン

おばあさんの耳に、あのなつかしい曲が、かすかに聞こえた気がして、笑いじわがいつそう深くなった。それから、としおばあさんは、両手でそっとふたを閉じた。